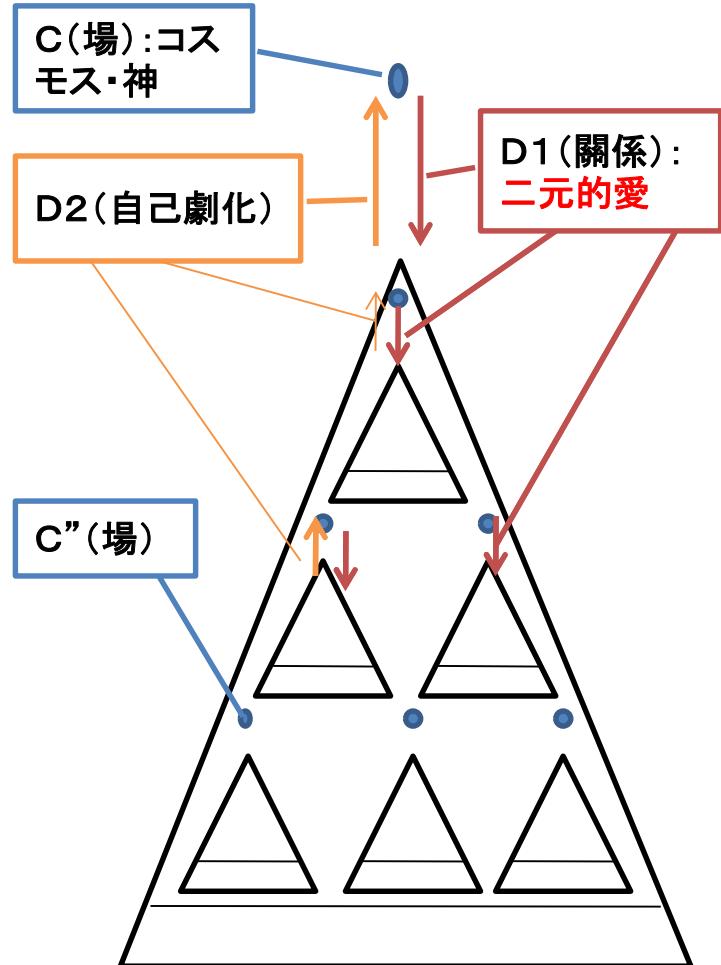


愛(ロレンスの場合は二元的愛)は、場(C及びC")から生ずる「関係:D1」。
クリスト教で言へば、「神が人間を愛する如く、人間も隣人を愛せよ」(神意・関係)。

《ロレンスの二元論と恒存「完成せる統一體としての人格」論との關聯》
DHロレンスの二元的愛とは……「吾々は生きて肉(A)のうちにあり、また生々たる實體をもつたコスモス(C)の一部であるといふ歡喜に陶酔すべきではなからうか」「吾々の欲することは、虚偽の非有機的な結合を、殊に金錢と相つらなる結合を打ち毀し、コスモス、日輪、大地との結合(C)、人類、國民、家族との生きた有機的な結合(A)をふたゝびこの世に打ち樹てることにある。まづ日輪と(C)共に始めよ、さうすればほかのことは徐々に、徐々に繼起してくるであらう」(『アポカリプス論』最終章)



上文及びロレンス思想要約の本論四十頁最終部分「自律性はうちにもとめるべきではない…」云々を、恒存の言葉で表現したのが「完成せる統一體としての人格」論(「テキスト」十頁圖)と小生は思へるのである。恒存は「前近代」と言ふ日本の桎梏を打破する爲に、日本人への遺言として「全集六『覺書』」に再度それを纏めたのではなからうか。ただ兩者の違いは、「愛は迂路をとらねばならぬ」と言ひ「その迂路をば宇宙の根源(コスモス:C)を通じること」とロレンスが主張したに對し、恒存は「全體・絶對:C」と言ふに留め、何を選択するかを各自の判断に委ねた點である。尚、「完成せる統一體としての人格」論は「全集六P703~4『覺書』」を纏めての小生の用語である。

二役のみならず何役(國民の一人、公務員の一人、家族の一人)、を操る「自己劇化」が出来得る人格として、「完成せる統一體としての人格」論がそこに登場するのである。何役かを操る「自己劇化」を別な表現では、各場面場面で關係的眞實を生かしていくのだ、との内容で言つてゐる。その究極が「完成せる統一體としての人格」なのだと。以下恒存の文を索引しながらその内容を記載する。括弧内は小生注である(「テキスト十圖及び十一圖」:参照)。何役かを操る各場面でそこから発生する、關係の「眞實を生かすために一つのお面をかぶる(役を演ずる・自己劇化)」「演戯なしには人生は成り立たない。つまり假説なしには成り立たない」。「眞實といふのは、ひとつの關係の中にある。個々の實體よりはその關係の方が先に存在している。人生といふものは、關係(目上↔目下・親↔子・師↔弟子・國↔國民、等々)が眞實なんで、一生涯自分のおかれた關係の中でもつて動いてゐる。いろいろな關係を處理していき、それらの集積された關係がその人の生涯といふもの。それを私は演戯だといふ」「われわれがこしらへたものは、相對的であつて絶對ではないといふ原理をちやんと心得て、こいつを絶對化(假説の完璧化・築城の完璧化)しようといふ努力」。(單行本『生き甲斐といふ事』中、對談「反近代につひて」P195・199)即ち要約すれば、各場面場面(國・企業・夫婦・親子・家庭・兄弟・師弟・友達・他者・等)から生ずる、關係と言ふ眞實(目上↔目下・親↔子・師↔弟子・國↔國民、等々)。その「眞實を生かすために一つのお面をかぶる(「眞實・至誠・愛・慈悲」等と言ふ名の宿命的役を演ずる:自己劇化)」。さうした行動の中に、しかもそれが典型として「テキスト十圖」の如く「假説の完璧化」が果たせられた場合に、「完成せる統一體としての人格」が現成するのである、と恒存は言ふ。